広島大学心理学研究　第10号　2010

九分割統合絵画法による他者イメージの理解

殘華ひとみ・石田　弓

Understanding of others image by “Nine-in-One Drawing Method”

Hitomi Zanka and Yumi Ishida

人が他者に対して抱いている無意識的かつ多面的なイメージを意識化させることは，他者との関わりにおける自身のあり方に目を向けさせ，自己理解を促すものとなる可能性がある。こうした機会は，青少年が自己を確立していく上でも重要なものとなる。本研究では，「あなたにとっての他者」というテーマで大学生に「九分割統合絵画法」（森谷，1986）を実施し，これによって描き手の対人関係のあり方についての理解を促すための視点を明らかにする。研究1では，本法に特有の描画内容を見いだし，描き手が日常的に接している他者との関わり方やそうした関わりによって生じる感情や考え，あるいは他者全般に対するイメージなどが示されやすいことが明らかになった。研究2では，描画後の質問によって描画を振り返らせることで，自身の他者との関わり方や対人関係の特徴に関する気づきや自己理解が促される可能性があることが示唆された。以上のことから，青少年に対して九分割統合絵画法を用いて「他者イメージ」を描かせることの意義を明らかにすることができた。

キーワード：九分割統合絵画法，他者イメージ，対象関係，描画後の質問，青年期

問題と目的

1．対象関係について

人が生きていく上で，対人関係は欠かせないものである。個人によって他者との関わり方は異なっているが，どのような対人関係をもつかということは，精神的健康にも強い影響を及ぼす。こうした対人関係のあり方を規定するものの1つとして，個人が他者に対して抱く「内的なイメージ」がある。精神分析学の立場では，この内的なイメージとしての対象との関係性を「対象関係（object relation）」と呼ぶ。藤山（2002）によると，対象関係とは自己表象と他者表象という2つの心的表象の間の関係であり，自我機能の1つとして人生早期からの記憶痕跡の蓄積によって構築され，ひとたび構築されるとその後の心的体験を組織化するシステムとして機能するものとされている。対象関係は実際の対人関係とは異なるが，対人関係のあり方を理解していく上で重要な概念である。

2．対象関係に関する研究の動向

無意識的なものである対象関係についての理解を深めるため，これまでに投映法を用いた研究が

なされてきた（TAT では山下（2003）など，ロールシャッハ・テストでは鈴木（2001）など）。また，井梅・平井・青木・馬場（2006）は，質問紙による対象関係の評定を試みている。しかし，これらはいずれも研究者が被検者の対象関係を評定する方法を用いたものであり，被検者が自身の対象関係を振り返る方法を用いた研究は見当たらない。

3．九分割統合絵画法

九分割統合絵画法（Nine-in-One Drawing Method ; NOD 法）は，森谷（1986）が密教の金剛マンダラからヒントを得て考案した描画法である。1 つのテーマについて，あらかじめ画面を 3×3 に九分割した画用紙に描かせるため，イメージの多面性を損なうことなく 1 つにまとめ，全体的に把握することができるという特徴をもっている。また，右下から中心に向かって逆“の”の字，あるいはその反対に中心から右下に向かって“の”の字の順に描かせるため，自由連想的にイメージが表現されていく。このことから無意識的で複雑なイメージを表現し，把握することに適した方法と考えられ，自己イメージに関する研究でも用いられている（森谷（1987）や松田（2002）など）。人が他者に対してもつイメージは 1 つだけではない。いくつかの異なるイメージをもつこともあれば，相反するイメージを抱くこともある。このように複雑なイメージを表現するにあたっては，1 枚の紙の上に複数の側面を表現でき，さらに統合することのできる NOD 法が有用であると考えられる。

4．NOD 法によって他者イメージを理解することの意義

他者に対する内的なイメージは，人生早期からの積み重ねによって形成されるため，日常的に意識されることは少ない。しかし，自身の他者イメージや対人関係の特徴を振り返ることは，青年期における自己確立や自己形成の一助にもつながると考えられる。そこで筆者らは，1 枚の紙の上に 1 つのテーマに関する複数のイメージを表現でき，さらにこれらを統合することのできる NOD 法を用いることで，無意識的かつ多面的な他者に対する内的イメージを意識化することができれば，青少年が自身の他者との関係性や対人関係を振り返ることにつながるのではないかと考えた。

5．本研究の目的

本研究では，大学生に NOD 法を用いて「他者イメージ」を描かせ，自身の対人関係を振り返ることが，自己確立や自己形成の一助となることを示すため，以下の 2 つの研究を行うこととする。研究 1 では，「あなたにとっての他者」というテーマで大学生に NOD 法を実施し，描画内容の特徴を検討することで，このテーマにおける NOD 法を読み解くための視点を明らかにすることを目的とする。研究 2 では，研究 1 で見いだされた描画特徴をもとに作成した「描画後の質問（Post Drawing Inquiry : PDI）」によって描画を振り返ることで，描き手の他者との関わり方に対する自己理解が深まり，自己確立や自己形成にもつながる可能性があるかどうかを検討することを目的とする。

【研究 1】

目　的

一般大学生に「あなたにとっての他者」というテーマで NOD 法を実施し，そこに表現される他者イメージ（描画内容）の特徴を検討することで，本法を読み解くための視点を明らかにすることを目的とする。

方　法

1．対象者

A 大学の大学生および大学院生 15 名（事例 A～O。男性 4 名，女性 11 名）。

2．手続き

2～5 名の集団で，「あなたにとっての他者」をテーマとした NOD 法を実施した。あらかじめ九分割しておいた A4 画用紙 1 枚を横置きにし，右下から反時計回りで中心に向かう順番，あるいは中心から時計回りに右下に向かう順番で描くように教示した。難しく感じる場合は，記号や文字を使用してもよいことを伝えた。描画後には，全体をまとめた 1 つのタイトルをつけさせ，さらに 9 個の描画ごとに簡単な説明を記述させた。

結　果

1．描画内容の分類

得られた 9 個の描画を描画内容（何について描いたものか）の観点からいくつかのカテゴリに分類した。その際，描画後に記述された各描画についての説明も参考にした。その結果，どのような他者がいるかについて描かれた「Ⅰ．他者の種類」，他者と関わり方について描かれた「Ⅱ．他者との関わり」，他者との関わりによって生じる感情や思考，あるいは状態などについて描かれた「Ⅲ．他者との関わりで生じるもの」，他者全般に対するイメージについて描かれた「Ⅳ．他者全般についてのイメージ」，Ⅰ～Ⅳのいずれにも該当しなかった「Ⅴ．その他」の 5 つに分類された。

また，「Ⅰ．他者の種類」は家族や友人，学校の教師などの「外的な基準によるもの（Ⅰa)」と「やさしい人がいる」などの「内的な基準によるもの（Ⅰb)」に分類された。「Ⅱ．他者との関わり」は「ポジティブなもの（Ⅱa)」と「ネガティブなもの（Ⅱb)」，および「両方を含むもの／どちらともつかないもの（Ⅱc)」の 3 つに分類された。「Ⅲ．他者との関わりで生じるもの」も「ポジティブなもの（Ⅲa)」と「ネガティブなもの（Ⅲb)」，および「両方を含むもの／どちらともつかないもの（Ⅲc)」の 3 つに分類された。以上の描画内容のカテゴリ一覧を Table 1 に示した。また，対象者ごとにどのカテゴリがいくつ表れたかを Table 2 に示した。

計 135 個（対象者 1 名につき 9 個の描画×15 名）の描画のうち，「Ⅰ．他者の種類」は 40 個（29.6%），「Ⅱ．他者との関わり」は 53 個（39.3%），「Ⅲ．他者との関わりで生じるもの」は 15 個（11.1%），「Ⅳ．他者全般についてのイメージ」は 22 個（16.3%），「Ⅴ．その他」は 5 個（3.7%）であった。「Ⅱ．他者との関わり」に関するイメージが最も描かれやすく，その内容はネガティブなものよりもポジティブなものが多かった。また，ポジティブとネガティブの両方が含まれているもの，あるいはどちらとも判断がつかないものも少なくなかった。次いで「Ⅰ．他者の種類」が多かったが，そのほとんどは外的な基準によるものであった。「Ⅲ．他者との関わりで生じるもの」は 1 割程度であり，ポジティブなものがやや多かった。「Ⅳ．他者全般についてのイメージ」も少なかったが，その内容は漠然としたものや抽象的・観念的なものであった。「Ⅴ．その他」はほとんどみられなかった。また，すべてのカテゴリが描かれたものはなかった。逆に 1 つのカテゴリしか描かなかったのは事例 J だけであり（「Ⅱ．他者との関わり」のみ），他の対象者は複数のカテゴリを描いていた。

Table 1 描画内容のカテゴリ一覧

Ⅰ. 他者の種類
Ⅰa. 外的な基準によるもの
Ⅰb. 内的な基準によるもの
Ⅱ. 他者との関わり
Ⅱa. ポジティブなもの
Ⅱb. ネガティブなもの
Ⅱc. 両方を含むもの／どちらともつかないもの
Ⅲ. 他者との関わりで生じるもの
Ⅲa. ポジティブなもの
Ⅲb. ネガティブなもの
Ⅲc. 両方を含むもの／どちらともつかないもの
Ⅳ. 他者全般についてのイメージ
Ⅴ. その他

Table 2 対象者ごとの描画内容のカテゴリ分類と傾向(型)

事例	Ⅰ		Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ	Ⅴ	傾向(型)
	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲc			
A(女)			4	2	1	1			1		②
B(男)		2			1				3	3	⑤
C(女)	8				1						①
D(女)	2		2		4					1	②
E(女)				1		2	2	1	3		⑤
F(女)				1		5	3				③
G(女)	7				1				1		①
H(女)			3		5				1		②
I(女)	5		1		3						⑤
J(女)			4	4	1						②
K(男)		1	1	1					6		④
L(女)	2	1	2		1				3		⑤
M(男)	4		2						2	1	⑤
N(男)	4		1	1		1			2		⑤
O(女)	2	2	4		1						⑤
計 (%)	40 (29.6%)		53 (39.3%)			15 (11.1%)			22 (16.3%)	5 (3.7%)	

2. 描画内容の傾向

対象者によってイメージされやすい描画内容は異なっており，どのカテゴリをどれぐらいの割合で描いたかによって，次の 5 つの傾向（型）がみられた（Table 2)。「Ⅰ. 他者の種類」を中心に描いた「①種類羅列型」(2 名，13.3%)，「Ⅱ. 他者との関わり」を中心に描いた「②関わり型」(4 名，26.7%)，「Ⅲ. 他者との関わりで生じるもの」を中心に描いた「③関わり結果型」(1 名，6.7%)，「Ⅳ. 他者全般についてのイメージ」を中心に描いた「④全般的イメージ型」(1 名，6.7%)，複数のカテゴリを同じくらい描いた「⑤混合型」(7 名，46.7%)。最も多かった「⑤混合型」では，「Ⅰ. 他者の種類」や「Ⅱ. 他者との関わり」あるいは「Ⅳ. 他者全般についてのイメージ」が合わさったものとなっていた。各傾向（型）における典型を図表で示した（Figure 1～5，Table 3～7)。

考　察

1. 描画内容の分類から明らかになること

「あなたにとっての他者」というテーマの NOD 法では，身近な他者やそれらとの具体的な関わりについてのイメージは表出されやすいが，そうした関わりから生じる感情や思考などにまで連想

が及ぶことは少なかった。より内的な側面である描き手の他者に対する様々な気持ちにアプローチしていくためには，PDI が不可欠になると考えられる。一方，身近な他者に関することではなく，他者全般に関する漠然とした，あるいはやや抽象的・観念的なイメージも描かれることがわかった。

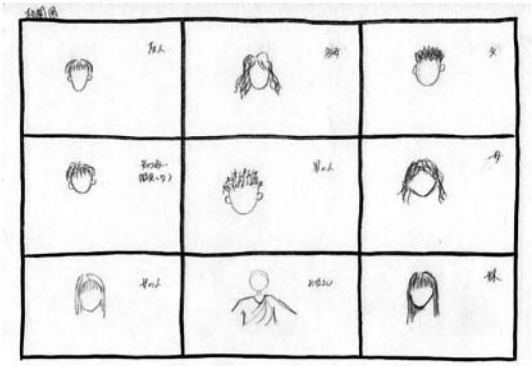

Figure 1　事例C『相関図』

Table 3 事例C『相関図』(種類羅列型)

描画内容	カテゴリ
① 男女で，男。	Ⅰa
② 俗世に生きていない。	Ⅰa
③ 自分も含まれる。	Ⅰa
④ 関わり。	Ⅱc
⑤ 身近にいる人。	Ⅰa
⑥ 身近にいる人。	Ⅰa
⑦ 身近にいる人。	Ⅰa
⑧ 身近にいる人。	Ⅰa
⑨ 身近にいる人。	Ⅰa

Figure 2　事例D『関係』

Table 4 事例D『関係』(関わり型)

描画内容	カテゴリ
① 自分の家の外にいる。	Ⅴ
② ご近所。「おすそわけ」。	Ⅱa
③ 見えない他者。遠いところの人。ネット上の人。	Ⅰa
④ 友だちや実家と電話をしている。	Ⅱc
⑤ メール。	Ⅱa
⑥ 直接会って喋ったり食べたり飲んだりする。	Ⅱc
⑦ 他者の集まり。コンサート。	Ⅱc
⑧ 旅行に行っている。一緒に行く友達と旅行で出会う人。	Ⅱc
⑨ 自分以外の人。自分が中心。家族や友だち，周りにいる人。	Ⅰa

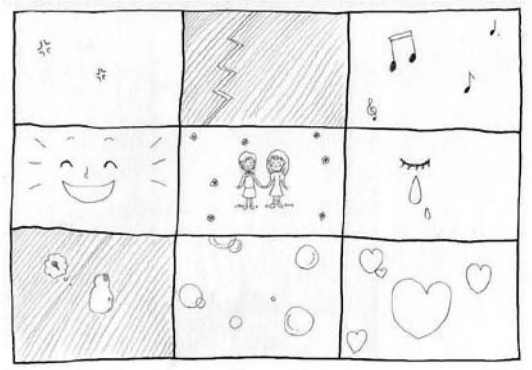

Figure 3　事例F『一緒がいいね』

Table 5 事例F『一緒がいいね』(関わり結果型)

描画内容	カテゴリ
① 相手のことを想う気持ち。	Ⅲa
② 悲しい気持ち。	Ⅲb
③ 楽しい気持ち。	Ⅲa
④ 関係の亀裂。	Ⅱb
⑤ 怒りの気持ち。	Ⅲb
⑥ おもしろいという気持ち。	Ⅲa
⑦ 暗闇の中で悩んでいて苦しい気持ち。	Ⅲb
⑧ ふわふわ癒されるような気持ち。	Ⅲa
⑨ 幸せな気持ち。	Ⅲa

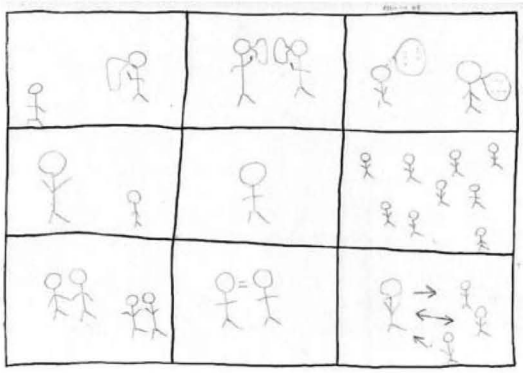

Figure 4　事例K『色々』

Table 6 事例K『色々』(全般的イメージ型)

描画内容	カテゴリ
① 人それぞれに関わり方がある。	Ⅳ
② 色んな人がたくさんいる。	Ⅳ
③ 考えていることや話すことが違う。	Ⅳ
④ 仲良く話をする人がいる。	Ⅱa
⑤ 仲良くしようとしても，離れていく人がいる。	Ⅱb
⑥ 目立つ人や目立たない人がいる。	Ⅰb
⑦ 人によって仲の良い人が違う。	Ⅳ
⑧ 基本的には同じところもある。	Ⅳ
⑨ 他人であっても，それぞれ自分をもっている。	Ⅳ

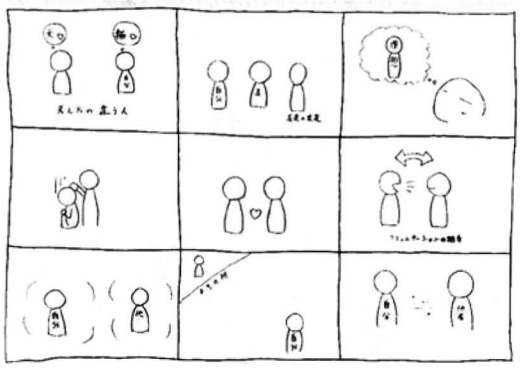

Figure 5　事例L『自分ではない人』

Table 7 事例L『自分ではない人』(混合型)

描画内容	カテゴリ
① 自分と他者はまったく同じでないが似たところがある。	Ⅳ
② 誰かがいるとコミュニケーションが生まれる。	Ⅱc
③ 自分にない所や尊敬できる部分がある人を，自分の理想とする。	Ⅰb
④ 自分の友達の友達。	Ⅰa
⑤ 自分とは考え方や好みが違う。	Ⅳ
⑥ なぐさめたり，なぐさめられたりする。	Ⅱa
⑦ 自分の空間と他者の空間がある。	Ⅳ
⑧ まだ会ったこともなく会うかもわからないけど存在する人。	Ⅰa
⑨ 自分のそばにいてほしい。	Ⅱa

「あなたにとっての他者」というテーマは漠然とした刺激であるため，描き手の日常的な対人関係場面が具体的に示されるだけでなく，描き手の他者全般に対する基本的な態度や構えなどもうかがうことができる可能性があり，描き手の対人関係の特徴を幅広い次元で推察できるという利点があると思われる。

また，「Ⅱ．他者との関わり」や「Ⅲ．他者との関わりで生じるもの」に関するイメージは，ポジティブなものが多かったが，これは一般大学生の対人関係における健康な側面を反映するものと推察される。しかし，ネガティブな側面やポジティブとネガティブの両側面が併存あるいは混在するものもみられた。NOD 法では 9 個の描画が課されるため，他者に対する様々なイメージが自由連想的に描かれるなかで，抑圧されていた対人関係上の葛藤や矛盾した感情あるいは思考が表面化してくることも考えられる。そして，こうした側面がとくに強調される場合には，描き手が何らかの対人関係上の困難さを抱えている可能性もある。

2．描画内容の傾向から明らかになること

一人の描き手がどの描画内容をどれぐらいの割合で描くかについては，5 つの傾向（型）がみられた。これは想起されやすい他者イメージに個人差があることを意味しており，描き手に固有の対

人関係のあり方を把握するための有用な情報になると思われる。

「①種類羅列型」は，描かれた他者の簡単な紹介のようなものであり，各人物の相互関連性が乏しかったり，描き手との関係性についての情報も表層的であることが少なくない。事例C（Figure 1, Table 3）でも，外的基準による数名の他者が描かれたが，それらは並列的であり，本人との関係性もみえにくい。「②関わり型」では，他者との関わり方が多く示されているが，その内容は表層的なものから観念的なものまで多岐にわたるものであった。事例D（Figure 2，Table 4）では，身近な人物との日常的な関わり方がわかるが，そのイメージはポジティブでもネガティブでもない表層的なものであり，対象関係の特徴は把握しづらいものとなっている。「③関わり結果型」では，想起された人物と関わることで生じる思いが示されやすく，他者との関わりで体験している情緒的な側面へのアプローチが容易になることが考えられる。事例F（Figure 3，Table 5）では，簡潔ではあるが，他者との関わりで生じる様々な「気持ち」が表され，情緒的な側面の探索を深める手がかりが得られやすい。「④全般的イメージ型」では，特定の人物は想起されないこともあり，描き手の日常の対人関係から距離のあるイメージが示されやすい。事例K（Figure 4，Table 6）でも，様々なタイプの他者が描かれたが，そのイメージは漠然としているため，対象関係の特徴についての理解が深まりにくい。「⑤混合型」は，どのカテゴリで構成されるかによってアプローチしやすい対人関係の側面が異なってくる。事例L（Figure 5，Table 7）では，「Ⅰ．他者の種類」と「Ⅱ．他者との関わり」，「Ⅳ．他者全般についてのイメージ」が3個ずつ描かれ，身近な人物から他者全般までの幅広いイメージが想起されているため，対人関係の特徴にアプローチする視点が多岐にわたる。

以上，いずれの傾向（型）においても，描き手の他者との関わり方や対人関係の特徴を詳しく探索していくためには，さらにPDIが必要となるが，どのカテゴリを多く描いたかによって対人関係における自己理解を深めるための心理的な準備状態が異なっていることが推察される。とくに「①種類羅列型」や「④全般的イメージ型」では，表層的なイメージが示されることが多いため，侵襲的にならないように配慮しながら，描かれた事柄に付随する思いを尋ねていくことで，少しずつ描き手の他者イメージや対象関係の特徴が明らかになってくるものと思われる。

【研究２】

目　的

研究1で明らかにされた描画特徴をもとに作成したPDIを用いて，描き手に描画を振り返らせることで，他者との関わり方や対人関係の特徴に関する気づきや自己理解が深まるかどうかを検討することを目的とする。

方　法

１．対象者

A大学の大学生および大学院生11名（事例P～Z。男性3名，女性8名）。

２．手続き

研究1と同様の教示でNOD法を個別に実施した。PDIでは，質問1「このテーマでNOD法を描

いてみて考えたことや感想」，質問 2「一番大切なイメージとして選んだ理由」，質問 3「絵を見て何か気づくことはあるか」，質問 4「普段，他者と関わる時のことを思い出して，絵と何か関連があるか」，質問 5「あなたにとっての他者とはどのようなものと思うか」の 5 項目を尋ねた。

結　果

1．描画内容の分類と傾向

研究 1 で得られたカテゴリを用いて対象者ごとに描画内容を分類し，描画内容の傾向を Table 8 に示した。これらを研究 1 の結果と合わせると（対象者数計 26 名），描画内容の数（全体で 234 個）は「Ⅰ．他者の種類」が 51 個（21.8%），「Ⅱ．他者との関わり」が 95 個（40.6%），「Ⅲ．他者との関わりで生じるもの」が 37 個（15.8%），「Ⅳ．人についてのイメージ」が 45 個（19.2%），「Ⅴ．その他」が 6 個（2.6%）となった。データ数を増やしても，研究 1 の結果と同じ傾向となり，「Ⅱ．他者との関わり」についてはポジティブなイメージが多く，ネガティブなものはその 3 分の 1 程度であった。「Ⅲ．他者との関わりで生じるもの」でも，ポジティブなものが半数以上を占めていた。

一方，描画内容の傾向（型）は「①種類羅列型」が 3 名（11.5%），「②関わり型」が 8 名（30.8%），

Table 8　対象者ごとの描画内容のカテゴリ分類と傾向（型）

事例	Ⅰ		Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ	Ⅴ	傾向（型）
	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲc			
P(女)				1	1	4	2	1			③
Q(女)	1				7				1		②
R(女)			1		5				3		②
S(女)			3	1		1		1	2	1	⑤
T(女)			1		2			1	5		⑤
U(女)	1	1	3	1	2	1					②
V(男)	6		1						2		①
W(女)	2						1		6		④
X(女)			2			5	1	1			③
Y(男)			8			1					②
Z(男)				2	1			2	4		⑤
計（%）	11（11.1%）		42（42.4%）			22（22.2%）			23（23.2%）	1（1.0%）	

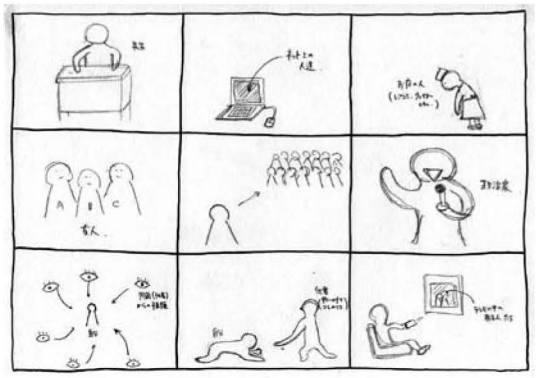

Figure 6　事例Ⅴ『遠い存在，身近な存在』

Table 9 事例Ⅴ『遠い存在，身近な存在』（種類羅列型）

描画内容	カテゴリ
① 自分以外の人すべて＝他者（多数大勢）。	Ⅳ
② 時に救いの手をさしのべてくれる他者。	Ⅱa
③ 周囲からの視線（社会的な評価をくだす人）＝他者。	Ⅳ
④ 友人も他者のうち。	Ⅰa
⑤ 先生方も他者のうち。	Ⅰa
⑥ ネット上で情報を提供したりなどしてくれる匿名の人々。	Ⅰa
⑦ 店員さんも他者。	Ⅰa
⑧ 政治家も他者。	Ⅰa
⑨ テレビや雑誌に出てくる会ったことのない有名人も他者。	Ⅰa

「③関わり結果型」が3名（11.5%），「④全般的イメージ型」が2名（7.7%），「⑤混合型」が10名（38.5%）となった。データの増加にともない「③関わり結果型」が少し増えた。各傾向（型）における典型を図表で示した（Figure 6～10，Table 9～13）。

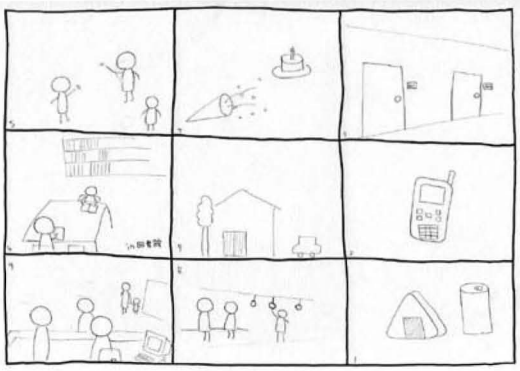

Figure 7　事例R『人とのつながりかた』

Table 10 事例R『人とのつながりかた』(関わり型)

描画内容	カテゴリ
① 対人関係でごはんを食べることが多い。	Ⅱc
② 連絡先がある。	Ⅳ
③ 部屋に遊びに行く，または呼ぶ。	Ⅱc
④ クリスマスや誕生日など，一緒にもりあがる。	Ⅱa
⑤ 道端で会ったら何か反応をする。	Ⅱc
⑥ 知っている人，親しい人でなくても，近くにいる時がある。	Ⅱc
⑦ 同じ空間にいても立場はいろいろ。	Ⅳ
⑧ 電車に乗っている人は，同じ方向に向かっていても，行く目的も考えていることも行く場所も違う。	Ⅳ
⑨ 電車に乗って帰省する。家族が待っている家がある。	Ⅱc

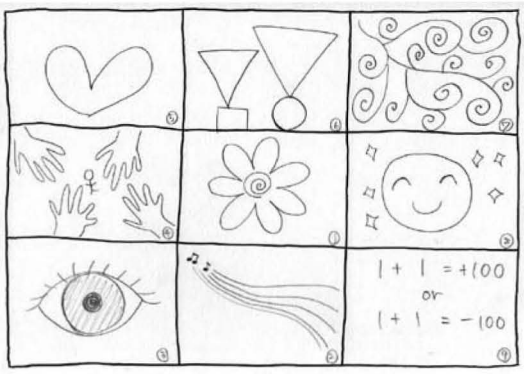

Figure 8　事例P『生活』

Table 11 事例P『生活』(関わり結果型)

描画内容	カテゴリ
① 他者と接することで花が咲くように嬉しくなる。	Ⅲa
② 他者と接することで歌をうたうように楽しくなる。	Ⅲa
③ 他者がいつも自分を見ている。	Ⅱc
④ 他者によって自分の行動が制限されるときがある。	Ⅱb
⑤ 他者と接することで1人では理解できない心の変化や愛情に気づく。	Ⅲa
⑥ 他者と接することで不安定になってしまう自分自身。	Ⅲb
⑦ 他者への接し方に正解がないために混乱してしまうことがある。	Ⅲb
⑧ 他者と接することで新しい自分に出会える。	Ⅲa
⑨ 自分1人では1+1=2にしかならないが，他者と接することで，それが100になったり，−100になったりと，心がこんなにも大きく変わる。	Ⅲc

Figure 9　事例W『私が考える“自分”と“他者”』

Table 12 事例W『私が考える“自分”と“他者”』
(全般的イメージ型)

描画内容	カテゴリ
① 自分以外の人間。	Ⅳ
② 自分の生活(人生？)にあまり影響を及ぼさない人。	Ⅰa
③ それぞれ個々に干渉されない領域を持っている。	Ⅳ
④ 存在していることも出会うこともない人も含まれる。	Ⅰa
⑤ 時に自分にとっての障害となったり，圧力となる。	Ⅲb
⑥ 考えていることや行動を把握することは難しい(できない)。	Ⅳ
⑦ 私利私欲のために生きる。	Ⅳ
⑧ 自分も他者からすれば他者。	Ⅳ
⑨ 誰もが他者であり，自分(個人)である。	Ⅳ

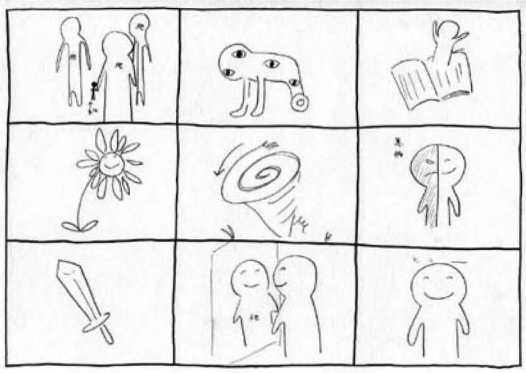

Figure 10　事例Z『違和感』

Table 13 事例Z『違和感』(混合型)

描画内容	カテゴリ
① 基本的にやさしい(やさしくあってほしい)。	Ⅳ
② 何をかんがえているのかよく分からない。	Ⅳ
③ 本を読むとき，色々な「他者」と出会う。	Ⅱc
④ 信用しきれない，不気味。	Ⅳ
⑤ 時に威圧的。	Ⅱb
⑥ でも，やさしくされるから分からなくなる。	Ⅲc
⑦ 時々，道具のように扱ったり，扱われたりする。	Ⅱb
⑧ 自分を映す鏡だと思う(だからなるべくにっこりしていたい)。	Ⅳ
⑨ 信じたい気持ちと信じたくない気持ち，支えられた経験とうらぎられた経験，そんなのが交じりあう混乱した場所。	Ⅲc

2．描画後の質問への回答

各 PDI への回答を描画内容の傾向（型）ごとにまとめた（Table 14～18）。

質問 1 では，9 個のイメージを表出することが難しいことが示された。しかし，「②関わり型」や「③関わり結果型」の対象者では，自身の他者との関わり方，あるいは「他者とのつながり」に関する思いも述べられた。また，「⑤混合型」でも「Ⅱ．他者との関わり」が多かったものでは，他者との関係性に目が向く傾向にあった。

質問 2 は，9 個のなかで「一番大切なイメージ」を選ばせることで，描き手が誰との関わりを大切にしているか，あるいは他者との関わりで何を大切にしているかを明らかにする質問であり，「②関わり型」や「③関わり結果型」および「⑤混合型」では，描き手の他者との関わりに関する回答が得られた。しかし，「①種類羅列型」や「④全般的イメージ型」では，表層的あるいは抽象的な回答となっていた。

質問 3 は，描画を振り返ることで，描き手が自発的に気づくものを明らかにする質問であるが，描画段階で「Ⅱ．他者との関わり」について描いていた対象者では，他者との関わり方についてさらに考えが深まるものがあった。しかし，「①種類羅列型」や「④全般的イメージ型」では，とくに思いつかなかったり，自身のこととは距離のある漠然とした回答になっていた。

質問 4 では，「②関わり型」や「③関わり結果型」あるいは「⑤混合型」の対象者で，他者との関わり方についての探索や意味づけがなされていたが，「①種類羅列型」や「④全般的イメージ型」では，表層的あるいは抽象的な回答となっていた。

質問 5 では，描画段階で「他者との関わり」について描いていたものは，他者は自分にとって好ましい存在であると意味づけるものが多かった。しかし，「①種類羅列型」や「④全般的イメージ型」では，やはり表層的あるいは抽象的な回答となっていた。

考　察

1．描画内容の分類と傾向から明らかになること

研究 1 で得られた結果に対象者を増員し，描画内容のカテゴリについて再度検討したが，やはり

「Ⅱ．他者との関わり」に関するイメージが最も多くみられた。これは描き手が自身の他者イメージや対人関係の特徴に目を向けていくための有用な情報になると思われる。また，描画段階では他者との関わりによって生じる感情や思考などの内的体験までが表されることは少なかったが，PDI段階で描画をもとに他者との関わり方を探索するなかで，少しずつ表出されていく可能性がある。

Table 14　質問1への回答

描画内容の傾向	事例	「このテーマでNOD法を描いてみて考えたことや感想」
①種類羅列型	V	9つ描くのは大変だった。他者を具体的に描くと描けるが，イメージとして描こうとすると難しい。他者というと表情がなくなりがち。
②関わり型	Q	他者との関わりを人間以外で表現するのは難しい。気づいたら1対1の関わりを描いたものが多い。
	R	他者とのつながり。友達や毎日会っている人，見かけているけど知らない人，家族の順に描いた。
	U	難しかったが，描いていくうちにこんな人とつながりがあったと思いついて意外と描けた。同じ人とのつながりでも違う面がある。時や状況によって普段は仲良くしていても離れたりする。
	Y	漠然とした「他者」。漠然としたものしか書けなかった。「他者」を考える時，自分中心に考えている。
③関わり結果型	P	4番目くらいまではスラスラ描けたが，イメージが出てこなくて似たようなものになった。
	X	自分にとっての他者は，一緒にいて嬉しいという大きな面と，憧れやつらい気持ちなどがある。
④全般的イメージ型	W	9つ出すのが難しかった。書き始めるとけっこう書けた。6番目までは。絵にするようなことは出てこなかった。
⑤混合型	S	今日これからパーティーをする。そのウキウキする気持ちが出た。一番始めに思い浮かんだのが，一緒にいて楽しいということ。
	T	たくさん出てくるかと思ったが，共通するものから出ている。他者はいろいろ。自分に影響する。他者は自分ばかりを見ているわけではない。
	Z	描くのが難しかった。イメージがわいてこない。1，2，9番目だけが自分の中のもの。他は人がよく言うことや，人だったらこう言うだろうというもの。共感はできるが自分の中のものではない。でも，4番目は自分の気持ち。

Table 15　質問2への回答

描画内容の傾向	事例	「一番大切なイメージとして選んだ理由」
①種類羅列型	V	自分の中で一番うまく表せた。
②関わり型	Q	周りのいろんな人たちとの関わりが一番大きい。
	R	順番に描いて出てきたからまとまった感じがする。
	U	相手は恋人。自分の時間の中で割合が大きい。一番素で接している。
	Y	他者の目線があってこそ自分を改められる。自分にはないものを与えてくれる。
③関わり結果型	P	他者が見ていることでどう行動すればいいかわかる。苦しい部分もあるが，生きていく上で他者との関わりは欠かせない。苦しいのも訓練。一人で頑張っていても誰かが見ていてくれる。
	X	一番感じること。一番人といたい理由。
④全般的イメージ型	W	自分が一方的に他者について考えているようなことを，他者からすれば同じように考えられている可能性もある，ということを考えることがある。
⑤混合型	S	少し前に金婚式に出た。出会うまでは他人だったのにすごいと思った。あこがれる。
	T	自分の世界観。自分で環境を選んで，いろんなものを持っている，輝いている人がたくさんいて，そこから吸収する。
	Z	②とどちらか迷った。二面性みたいなものがあるとずっと思っている。気まぐれに変わるもの。助けられたり振り回されたりする。最近は振り回されることが多かったので⑨にした。忘れちゃいけない，だまされないぞと思う。

Table 16　質問3への回答

描画内容の傾向	事例	「絵を見て何か気づくことはあるか」
①種類羅列型	V	特になし。
②関わり型	Q	記号的なせいもあるが個性が出ていない。9つ描くのが難しかったのは，人とあまり関わってないということだろうか。
	R	最近起こったこと。特に前半はいつものこと。
	U	自分がだいたい登場する。他者だけ描こうとしたが難しい。他者と同じ位置にいると自分も笑っている。外から見ている時は笑っておらず複雑な表情。距離を感じているからこの表情なのか，笑えないから距離をとっているのか。⑤以外は知り合いでつながりがある。⑤は知り合いではないが自分に大きな影響を与える。
	Y	質問1の回答と同じ。
③関わり結果型	P	プラスが4つ，マイナス4つ，最後がプラス・マイナス両方。
	X	並んでいる絵が多い。大人数ではなく2～3人。全部似たり寄ったりで，激しい感じではない。
④全般的イメージ型	W	他者について書いたが，結局自分を含めて人について書いている。他者＝自分＝人。立場によって変わる。だから他者がどうかと考えたことがない。自分も含めて「人」は。
⑤混合型	S	他人についてプラスに捉えたい。他人だからわからないこともあるが，そうでないことも多い。一緒にいて成長できる。楽しい。
	T	授業で尖ったものが描かれると荒んでいると習ったので，描かないようにした。でもチラホラある。
	Z	3番目は自分の身近なものだから早めに思いつくのだろう。8番目はそうだったらいいという気持ちな気がする。もっと絵を描く力があったら，⑦はこんな攻撃的に描かなかっただろう。それだけじゃないと思う。9番目はもっと二面性がごちゃごちゃしているように描いただろう。

Table 17 質問4への回答

描画内容の傾向	事例	「普段，他者と関わる時のことを思い出して，絵と何か関連があるか」
①種類羅列型	V	他者には，比較的遠い他者と身近な他者がいる。
②関わり型	Q	普段の大学の友達のこと。友達が少ないのが難しかった原因だろうか。
	R	普段のことをそのまま描いた。
	U	普段のことをそのまま描いた。1番目だけそのまま。
	Y	周りの人は生き方の参考となれるようにがんばっていると思う。1，3番目は部活・サークルの人などを描いた。
③関わり結果型	P	一人暮らしでさみしい時の親からの電話や，3，4番目のように見られて抑圧され，6番目のように不安定になったり，7番目のようにもやもやしたりする。
	X	ありがたいと思う。助けられたりした部分を描いている。8番目は悩んだりすることもあるので描いた。
④全般的イメージ型	W	3，5，6，7番目が，よく友達といて思うこと。
⑤混合型	S	仲のいい友達が少ないが，その少ない友達には恵まれている。半分は幸せ。半分は喧嘩やすれ違い。
	T	一番意識しているのは6番目。注目してほしい気持ちがあって気を引こうとしている。でも他者には他者の見たいものや付き合いたい人がいる。3番目は他者の見ているもの。4番目は他者の役割とも関わりがあるということ。
	Z	どれも普段思っていること。

Table 18 質問5への回答

描画内容の傾向	事例	「あなたにとっての他者とはどのようなものと思うか」
①種類羅列型	V	自分以外は全て他者。その中でも近い・遠いなどのカテゴリがある。いろんな他者がいる。時に具体的に捉えられる場合もあれば，目には見えないがいるという場合もある。
②関わり型	Q	関わりあうことで自分が変わる。
	R	他者といっても接点のない人だと関わりが考えられない。何かくくりがあってその中に立場がある。社会的なグループとは別に自分のくくりがある。知らないくくりもあるのだろうか。
	U	楽しい時間を与えてくれたり，理解者だったり，がんばる力をくれたりする。たまに自分だけが違うように感じる。
	Y	生きるため，お互いをより良い方向に持っていけるもの。
③関わり結果型	P	かけがえのない存在だが，いて苦しかったり嬉しかったりする。
	X	ほっとする。もっとがんばろうと思うパワーになる。
④全般的イメージ型	W	人。
⑤混合型	S	幸せを運んでくれるもの。
	T	基本的にいいもの。手痛い批判を受けたりもするが，それも結局は自分を形作り成長させる。影や見えないものがあって怖い。わからない。
	Z	描いた通り。抽象的に描いたので描き足すことはない。何か一つ足りないとしたら，自分が悪口を言ったりする場合の他者が抜けている。

一方，単純に他者の種類だけを描いたものや，特定の人物ではなく他者全般についてのイメージを描いたものは2割程度であり，これらは抽象的あるいは漠然とした内容のものになりがちであった。しかし，そこにも描き手の対人関係に関する基本的な考え方や姿勢が反映されていたり，表面的な関わり方や距離をとった関わり方など，描き手の他者に対する基本的な態度が投映されていることも考えられる。

また，個人のなかで描かれやすい描画内容のカテゴリをみたところ，やはり他者との関わりを中心に描くもの（関わり型）が多かったが，それ以上に複数のカテゴリが同時に描かれるもの（混合型）が多くみられた。9個のイメージを描かせることで，1種類の内容に限定されず，多面的な情報が得られやすいところにNOD法の利点があり，「⑤混合型」はこの利点が活かされた反応と言える。そのため描き手の他者イメージや対人関係の特徴について多面的な角度からアプローチできる可能性がある。

なお，「Ⅱ．他者との関わり」に関するイメージは，全体的にネガティブなものよりもポジティブなものが多かった。あるいは，ポジティブなものとネガティブなものがバランスよく示されているものもみられたが，これは対象者が健常な大学生であったことが関係していると思われる。すなわち，日頃の他者との関わりでネガティブな感情や思考を抱くことがあっても，対人関係全体としては好ましい状態にあることが多いため，他者イメージもポジティブになりやすいと考えられる。

2．描画後の質問への回答から明らかになること

どのPDI項目に対しても，描画内容の傾向（型）が「①種類羅列型」や「④全般的イメージ」の対象者では，表層的あるいは抽象的・観念的な回答になることが多く，描き手の内的体験につながる回答は得られにくかった。しかし，「②関わり型」や「⑤混合型」，あるいは少数ではあったが「③関わり結果型」では，対人関係に関する回答が引き出されやすく，これをもとに描き手の他者との関わり方や対人関係の特徴についての再確認がなされたり，さらに探索を深めていくこともできることが明らかになった。以下に，各PDI項目の特徴と有用性について考察した。

質問1（このテーマでNOD法を描いてみて考えたことや感想）では，NOD法で9個の他者イメージを描くことが意外に難しいことがわかったが，これはNOD法が精神分析療法における自由連想に類似しており，しかもイメージを描き表す作業は，言語的に連想する以上に難しいことによるためと思われる。「①種類羅列型」はそうした難しさを無難に回避するための対処を反映したものであったり，自身の対人関係についてイメージする際の不安に対する防衛的な反応とも考えられる。よって，本法を心理臨床場面で実施する際には，描き手の心理的な負担にも考慮しておく必要がある。しかし，最終的に表出された9個のイメージは，普段はそれほど意識することのない自身の他者イメージや対人関係を振り返るための刺激になるため，健常な青少年の自己理解を促すという意義があると考えられる。実際に他者との関わり方について描く大学生が多かったこともあり，本法は青年期において自身の他者との関わり方や他者とのつながりに関する気づきや自己理解を促すことが期待できそうである。

質問2（一番大切なイメージとして選んだ理由）では，自身が描いた9個の描画のなかで最も大切に感じるイメージを選ばせ，その理由を尋ねることで，描き手がどのような人物との関わりを大切にしているか，あるいは他者との関わりにおいてどのようなことを重視しているかに注目した。そして，ここでもPDIによって描き手の他者との関わりに関する探索が促されることがあったことから，本法における有用な質問項目になると考えられる。しかし，その一方で表層的あるいは抽象的な回答もみられたことから，描画内容の傾向（型）によっては，描画後の対人関係に関する探索が侵襲的にならないように注意する必要がある。とくに抽象的・観念的な他者イメージを描くものは，自身の対人関係に目を向ける際の不安に対して知性化の機制をはたらかせている可能性もあるため，中核的な葛藤には触れないように気をつけることが大切となる。

質問3（絵を見て何か気づくことはあるか）では，描画内容から連想された気持ちや描く際にとくに意識した事柄が語られやすく，そこから描き手が自身の対人関係の特徴についての自発的な気づきを得ることもあるという点で，本法における有用な質問になると思われる。とくに描画段階で他者との関わりについて描かれていたものでは，この質問によってさらに自己探索が深まることもあった。しかし，気づきを求めることは，「①種類羅列型」の描き手にとっては侵襲的に感じられる可能性もあるため，とくに思いつかないような場合には，それ以後の質問をひかえる必要がある。

質問4（普段，他者と関わる時のことを思い出して，絵と何か関連があるか）では，日常の対人関係にまつわる出来事や考えなどが語られ，そこから自身の他者との関わり方に関する探索や意味づけがなされやすいことから，本法における有用な質問になると思われる。しかし，「①種類羅列型」

や「④全般的イメージ型」では，やはり表層的あるいは抽象的な回答が目立っており，自身の対人関係に目を向けることに何らかの抵抗があることが推察されるため，こうした質問は負担になりやすいことが考えられる。

質問5（あなたにとっての他者とはどのようなものと思うか）では，これまでの4つの質問によって内面化を促してきたこともあり，描画段階で他者との関わりについて意識化されていた描き手は，自分にとっての他者の存在の意味を総括するような回答になりやすいことが予想される。しかし，「①種類羅列型」や「④全般的イメージ型」では，すべての質問を通じて表層的あるいは抽象的な回答になりがちであったことから，描画段階でこれらの傾向を示す描き手に対しては，PDI段階ではすべての質問項目を尋ねることをひかえたり，より侵襲的でない質問項目を別に用意しておく必要もあると思われる。

以上，「あなたにとっての他者」というテーマでNOD法を描くことは，描き手にとっての日常的な他者やそうした他者との関わり方を目に見えるかたちで表すものとなっており，さらにPDIでこれを振り返ることで，自分のなかで他者がどのような存在として意味づけられているかを再認識する，あるいは新たに発見する機会を与えることから，対人関係における自身のあり方や他者との関係性についての理解を促しやすいと考えられる。

NOD法は，非構造的な刺激をもつ投映法であるために，「あなたにとっての他者」に関しても描き手の前意識的あるいは無意識的な領域にある他者イメージが表されやすいものと思われる。しかも，9個のイメージが自由連想的に想起されていくため，その過程では思いがけない他者イメージが生じてきたり，矛盾や葛藤をともなったアンビバレントな他者イメージが表出される可能性もある。よって，どのような他者イメージがどのような継起で展開していくかについて注目することでも，描き手の対人関係に関する問題について考えていく糸口が得られやすいものと思われる。

佐伯（1991）は，描画法では「描き出すことによって自分もまた変わり，変わることによってまた別の描き出しをしたくなってゆくという変化過程」が生じることを述べているが，これは描画法を心理臨床場面で継続的に実施する際に活かすことのできる特性である。しかし，NOD法では1枚の紙に9個の描画を順に表すものであるため，描画過程そのものが描き手の内的イメージの変容や発展を生じさせる特性を有していると言える。そして，複数のイメージを振り返り，統合していくなかで，与えられたテーマに関する「意味の生成や吟味」（佐伯, 1991）がなされやすい。よって，「あなたにとっての他者」というテーマのNOD法でも，描き手の他者との関係性に対する認識の変化や他者の存在に対する意味づけが促されやすくなることが期待できる。

総合考察

1．本研究の成果

本研究では，一般大学生を対象に「あなたにとっての他者」をテーマとしたNOD法を実施し，青少年が自身の「他者イメージ」をもとに，他者との関わり方や対人関係の特徴についての気づきや自己理解を促すことのできる方法を検討した。

研究1では，本法における描画内容の特徴を検討したところ，「他者の種類」，「他者との関わり」，

「他者との関わりで生じるもの」,「他者全般についてのイメージ」,「その他」の5つのカテゴリが得られた。また，どのカテゴリをどのような割合で描くかによって，「種類羅列型」,「関わり型」,「関わり結果型」,「全般的イメージ型」,「混合型」の5つの傾向（型）が見いだされた。これらは，本法によって青少年が身近に存在する他者や他者との関わりの場面などを描き表し，自身の他者との関係性についての気づきや自己理解を深めるための有用な視点になることが示唆された。とくにNOD法では9個のイメージを描くことが課題であるため，他者に対する一面的なイメージだけでなく，ポジティブな側面やネガティブな側面，あるいはそれらが葛藤状態にあるような多面的なイメージが表されやすくなることから，心理臨床場面で描き手の対人関係における情緒的な問題を扱っていく際にも役立つと考えられる。

研究2では，研究1の知見をもとに本法におけるPDIを作成し，描き手に描画を振り返らせることで，他者との関わり方や対象関係の特徴についての気づきや自己理解が深まるかどうかを検討した。そして，描画内容の傾向（型）によってPDIに対する回答の質に違いがあることが示された。とくに「種類羅列型」や「全般的イメージ型」のものは，どの質問項目に対しても表層的あるいは抽象的な回答がみられやすく，自身の他者との関わり方や対人関係の特徴に関する気づきや自己理解が得られにくい傾向があった。しかし，描画段階で他者との関わりについてのイメージが表出されたものでは，PDI段階でも描画を通じて自身の他者イメージを探索していく作業がなされ，そこから他者との関わり方に関する気づきが生じやすくなり，最終質問では他者の存在に対するポジティブな意味を見いだすことができる可能性も示唆された。

これまでの対象関係に関する研究では，研究者が被検者の対象関係の特徴を評定する手法を用いたものが多かったが，本研究ではNOD法を用いて，描き手が自身の他者イメージを描画で自由連想的に表現し，これを振り返ることで他者との関わり方や対人関係の特徴に対する自己理解を深める方法を考案した。この方法は自分のなかから生起してきたイメージに刺激されて，次のイメージを描き連ねていくものであることから，夢分析における連想法と類似するところがある。しかし，夢よりも目に見えるかたちで残る描画の方が，描き手とともに対人関係についての探索が容易になりやすいと思われる。

2．今後の課題

本研究では，対象者が研究1では15名，研究2では11人と少数であったため，研究1で見いだされた描画内容のカテゴリや傾向（型）は暫定的なものであり，現時点で本法の一般的な特徴とみなすことは難しい。よって，今後も対象者を増やすことで，これらのカテゴリや傾向の一般性を検証し，必要に応じて改正していく必要がある。

また，描画内容が描き手にとってポジティブなものであるか，ネガティブなものであるか，あるいはそこにアンビバレントなものがあるかは，一般的な観点をもとにして筆者らが判定したが，これに関しても，描き手自身が認識するところで判別していく必要があると思われる。

さらに，研究2では，PDIを通じて描き手にとっての他者イメージを個別に検討したが，各質問項目の意義や有用性についての考察に留まり，本法が青年期における自己確立や自己形成にどのようにつながっていくかを具体的に検討するには及ばなかった。よって，今後は本法が大学生の自己

確立や自己形成の一助にもつながるかどうかを，詳細な事例研究を通して明らかにしていく必要がある。

引用文献

藤山直樹(2002). 対象関係　小此木啓吾・北山　修(編)　精神分析事典　岩崎学術出版社　315-316.

井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子(2006). 日本における青年期用対象関係尺度の開発　パーソナリティ研究, 14(2), 181-193.

松田美登子(2002). 九分割統合絵画法を用いての時間的展望の研究　－大学生の自己イメージを中心に－　臨床描画研究, 17, 147-161.

森谷寛之(1986). イメージの多様性とその統合　－マンダラ画法について－　心理臨床学研究, 3(2), 71-81.

森谷寛之(1987). イメージ調査法としての九分割統合絵画法　－大学生の「自己イメージ」について－　臨床描画研究, 2, 154-167.

佐伯　伴(1991). イメージと絵画－認知心理学からの考察－　家族画研究会（編）　臨床描画研究 Annex, **3**, 38-57.

鈴木正義(2001). ロールシャッハ尺度による対象関係の査定－1－　人文論究, 52, 1-26.

山下京子(2003). TAT 反応に示された対象関係に関する研究　広島女学院大学論集, 53, 1-26.